新見公立大学紀要　第38巻
pp. 135－141, 2017

研究ノート

子どもの表現の育ちと保育者のかかわり方（1）

－保育者のイメージ画の描画やダンス創作シートを中心に－

福武　幸世[1)]*・岡本　直行[2)]

1）新見公立短期大学幼児教育学科非常勤講師　2）新見公立短期大学幼児教育学科

（2017年11月15日受理）

本研究は、造形表現、言語表現、音楽表現、身体表現の総合的な実践から、子どもと保育者、子ども同士のかかわりにつながる指導の実践方法を検証したものである。

子どもと保育者とのかかわり方に重点を置いた保育内容の指導方法について考察するために、造形表現活動や身体表現活動を融合した総合的なダンス創作活動の授業を受講生（保育者）に実施した。授業では、創作過程でみられる受講生の変化や内容を観察、記録し、授業終了後には自己評価シートによるアンケート調査を行った。

その結果、受講生全員が身体を動かすことへの不安や抵抗を払拭すること、様々な表現を認め合う相互理解を深めることができ、大きな達成感を得ることができていた。受講生のこのような体験は、造形表現や身体表現を連携させた指導方法によるものであり、自身のイメージを具体的に表現する力や身体を解放し発信する力、受信する力を身につける指導法として有効といえる。また、保育者の資質向上につながり、子どもたちの表現力の引き出し方、環境の整え方、心身の発達の助長につながると考える。

（キーワード）保育内容、身体表現、幼児体育、ダンス、造形表現

Ⅰ．はじめに

保育内容「表現」には、造形表現、言語表現、音楽表現、身体表現がある。子どもとのかかわりにおいて、これらの表現は、領域ごとに、また、複合的に指導が行われるが、保育現場では子どもの表現を助長させる環境づくり等の総合的な配慮が重要である。お遊戯会や生活発表会等では、子どもが身体で表現しやすい環境を用意する必要があり、保育者は舞台の設営、衣装の制作、音楽の選曲等の環境を整え、子どもとかかわりながら身体表現を指導することが望まれる。

保育者が子どもとかかわりながら子どもの表現を育てていくには、まず第１段階として、保育者自身が自己の力を最大限に発揮できる表現力をもつことが望まれる。次に第２段階として、自己の力を最大限に発揮できる表現力をもった保育者が、環境づくりを整えながら、実際に子どもと一緒に身体表現を行い、子どもの実践から得た情報をもとに指導方法や子どもとのかかわり方を見直し、再び実践を繰り返すことが、子どもの表現力の育ちにつながると考えられる。

そこで、本研究では、第1段階の保育者自身の表現力を高めることを目的にし、保育者（受講生）が造形、言語、音楽、身体を総合的に用いた創作活動を行い、その過程を通して、保育者の表現力の変化について考察を行う。また、子どもの表現力の引き出し方や環境の整え方につながる課題を見出す。

Ⅱ．方法

総合的な創作活動について考察するために、『保育園、幼稚園、こども園のお遊戯会や生活発表会で実演できる身体表現作品の創作』と題した身体表現の授業を実施する。

身体表現の作品を創作する過程において、造形、言語、音楽の各表現活動を実施し、身体表現のイメージを構築する。造形表現ではイメージ画や舞台小道具の制作を、言語表現ではストーリーの制作を、音楽表現ではストーリーに適した音楽や効果音の選曲を行う。身体表現ではストーリーや音楽からイメージした動きや、小道具を用いた動きの制作を行い、身体表現発表後の自己評価から、保育者の表現力の変化について考察を行い、子どもとのかかわり方について課題を見出していく。

受講生は、保育者２０代～４０代の６名（男性３名、女性３名）である。授業は平成２９年８月８日（火）・９日（水）・１０日（木）の３日間行った。１日目の８月８日（火）１限目から５限目までは主にリズムダンスを修得する授業を実施した。２日目の８月９日（水）の１限目から

*連絡先：福武幸世　新見公立短期大学幼児教育学科　718-8585　新見市西方1263-2

３限目まではリズムダンス作品の創作を実施した。本研究の『保育園、幼稚園、こども園のお遊戯会や生活発表会で実演できる身体表現作品の創作』は、８月９日（水）４限目と５限目の３時間と８月１０日（木）１限目から５限目までの７時間半、合計１０時間半の実践内容を考察したものである。

Ⅲ．制作過程

１．イメージ画の制作　＜８月９日（水）４限　１時間半＞

『保育園、幼稚園、こども園のお遊戯会や生活発表会で実演できる身体表現作品の創作』のテーマを「冒険」として、各自のイメージで「冒険」をテーマに描画表現を行った。自由な発想やイメージを引き出すために、イメージ画のモチーフは絵本や写真、自らの体験、想像したもの等から、自由に選択できるよう配慮した。

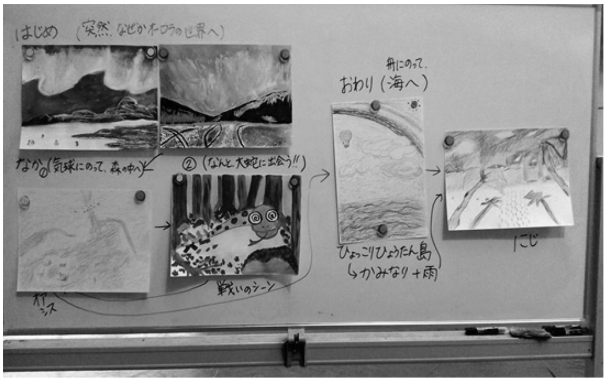

図１　受講生のイメージ画

２．イメージ画からストーリー制作への展開

＜８月９日（水）５限　１時間半＞

イメージ画を言語に発展させるために、自身の書いた冒険の絵について説明を行う。説明の主な内容は以下の通りである。

・受講生Ａ（女性）と受講生Ｂ（女性）のイメージ画は、ともにオーロラの世界を表現していた。

・受講生Ｃ（男性）のイメージ画は、森の中を描き、動物たちがいるオアシスに辿り着く絵を表現していた。

・受講生Ｄ（女性）のイメージ画は、大蛇と子どもたちの戦いを表現していた。

・受講生Ｅ（男性）のイメージ画は、気球に乗り雨や雷をくぐり抜け、最後に虹が掛かる空を飛んでいる様子を表現していた。

・受講生Ｆ（男性）のイメージ画は、南の島を表現し、冒険を終えたあとに残った足跡を表現していた。

各自のイメージ画の発表、意見をもとに、ストーリーの内容について協義を行う。ストーリーは起承転結を含めた「はじめ－なか１－なか２－おわり」の構成で組み立てることになった。完成したストーリーは以下の通りである。

（１）はじめ

冒険の舞台は寒い氷の世界から始まる。美しいオーロラが見える。そこにはペンギンたちもいる。気球に乗った冒険者たちが現れ、一緒に冒険の旅が始まる。（受講生Ａと受講生Ｂのイメージ画より）

（２）なか１

気球は森の中へ。森の中を歩いたり、崖を登ったりして探検をする。そこへ突然、大蛇が現れる。子どもたちは大蛇に追いかけられたり、大蛇にぐるぐる巻きにされたりするが、格闘して大蛇を追い払う。そしてさらに森の中を進んでいくと、動物たちのいるオアシスに辿り着く。オアシスは海へとつながり舟で冒険を続ける。（受講生Ｃと受講生Ｄのイメージ画より）

（３）なか２

海に出る。雨や雷にもあったが最後に虹が出てくる。（受講生Ｅのイメージ画より）

（４）おわり

南の島に辿り着く。冒険を続けた後、みんなはそれぞれの道を歩いていく。（受講生Ｆのイメージ画より）

３．ダンス創作シートを活用したダンスの制作

＜８月１０日（木）１限～５限　７時間半＞

イメージ画の発表や協議によって膨らんだイメージをもとに、ストーリーを身体の動きで表現する。各自のイメージや気づきを表現に適切にフィードバックするために、ダンス創作シートを用い、活動の流れを詳細にまとめながら動きを創作する。

イメージを動きに反映させるポイントは、初めから細かい動きを気にするのではなく、大まかな動きの構成を確立し、全体の流れを目に見えるようにすることにある。全員で協議し、「はじめ－なか１－なか２－おわり」の各パー

ダンス創作シート（創作の流れ）
（１）テーマ（題名）の決定
（２）音楽の決定
（３）モチーフの制作（テーマに合った動きを考えて動いてみよう）
（４）カウントのとり方（作品の全体像を把握しよう）
（５）振りの決定/音合わせ（動きを音に合わせてみよう）
（６）構成の決定（フォーメーションを考えて動いてみよう）
（７）踊り込み（スタートからラストまで何回も踊って確認しよう）
（８）衣装、小道具の制作
（９）発表

図２　ダンス創作シート

トを大まかな流れで創作することに一致した。細かい動きは全体の動きが確定してから行う。

創作シートは、９項目からなるシートである。創作シートを活用した創作の流れは以下の通りである。

（１）テーマ（題名）の決定

題名については、作品の完成後につけることになった。受講生同士の作品制作を通して、作品制作の過程で見られる意見交換や動きの発見等、様々な要素から最終的に考え出される題名が、この作品の「核」となることを期待することにした。

（２）音楽の決定　＜８月１０日（木）１限　１時間半＞

作品のテーマを鑑賞者に適切に伝えるためには、作品の内容に適した音楽の選曲が重要である。各場面の選曲を全員で行った。

・「はじめ」の場面の音楽

寒い感じ、オーロラの光が揺れているイメージ、不思議な感じ等の雰囲気が感じられる場面に適した音楽を求めた。冒険の旅が始まるという気持ちを表現するために、明るい場面になるよう軽快な音楽を選曲した。

曲：CD「Sound of sky」Susumu Yokotaより８曲目「Form An Idea」を使用

CD「THE LION KING」ORIGNAL MOTION PICTURE SOUNDTRACKより８曲目「UNDER THE STARS」と２曲目「I Just Can't Wait To Be King」を使用

・「なか１」の場面の音楽

突然、大蛇が現れ、子どもたちが驚く様子や激しい戦いの場面、子どもたちの勝利を表現できる音楽を求めた。戦い後の森を進みオアシスを発見する場面では、動物と子どもたちの躍動感が溢れるような音楽を選曲した。

曲：CD「WATER BOYS MOVIE&TV ORIGINAL SOUNDTRACKBEST」より １曲目「Introduction Of W.B.」と13曲目「Oh Shit!!」を使用

・「なか２」の場面の音楽

冒険の楽しい様子や苦しい様子をリズミカルに表現できる音楽を選曲した。また、より臨場感が感じられる場面にするために、雨や雷の効果音を使用した。

曲：CD「ひょっこりひょうたん島」田中真弓、森の木児童合唱団、SHINESを使用

曲：CD「とく得BOX効果音：自然の音」より「激しい雨」「雷」を使用

・「おわり」の場面の音楽

空に掛かる虹を見上げながら、冒険を乗り越えた達成感や仲間との友情、冒険を振り返り、感動や懐かしいという思いが感じられる音楽を選曲した。

曲：CD「ジャッキーといっしょ　ようちえん・ほいくえんでならう歌」タンポポ児童合唱団より　３１曲目「にじ」新沢としひこ、スマイルキッズを選曲

以上の曲をつなぎあわせ、総時間が６分５１秒の曲を使用することになった。

（３）モチーフの制作

（４）カウントのとり方

（５）振りの決定/音合わせ

（６）構成の決定

創作シートの（３）から（６）は、体の動きを中心としたダンスの実践となるため、２限目～４限目の合計４時間半の時間をかけて同時進行で進めていく。（３）から（６）の行程を融合させて内容や動きを考え実践し、フィードバックを繰り返して作品を仕上げていった。イメージ画から立体的な映像に変換させるように、モチーフ（動き）を創作する。

ポイントは、「はじめ - なか１ − なか２ − おわり」の順に大まかに創作していき、音楽のメロディーやカウントに動きをあてはめていくことである。

・「はじめ」の場面のモチーフ

ペンギンの動き、寒さでブルブル震える動き、カラーセロファンを貼った傘を使用しオーロラが迫ってくる様子を表現する動き等のダンスを創作した。オーロラに見立てた傘と風船を貼った傘が集合し、傘の球面がつながると単体の傘が巨大な気球に生まれ変わる、また、つま先立ちとしゃがみこむ姿勢を繰り返す動き等を取り入れ、大胆でリズミカルな動きや浮遊感を表現した。

図３　「はじめ」の場面の創作の様子

・「なか１」の場面のモチーフ

大蛇になりきる男性受講生と、子どもたちになりきる女性受講生に分かれてモチーフを表現した。大蛇の動きは頭

と腹と尻尾の３箇所に分かれ、波のような動きやとぐろをぐるぐる巻きで表現する動き等を取り入れた。

子どもたちの動きは、戦いのシーンをダイナミックに表現するために、大蛇に驚き声を上げる、逃げる、追いかけるという動きや体のバランスを崩す動きを取り入れ躍動感を出した。また、子どもの日常生活の遊びに見られるジャンケンを取り入れ、子どもが次々に戦いに臨むシーンを表現した。

指導のポイントは、曲のリズムにとらわれると動きが早くなり、リズムに狂いが生じるため、イメージ画を忠実に表現することを重視することである。リズムカルな動きとともに、ストップモーションやスローモーションの動きを用い、デフォルメ（動きの誇張）を取り入れ、変化に富んだ動きの指導を行った。

図４　「なか１」の場面の創作の様子１

図５　「なか１」の場面の創作の様子２

・「なか２」の場面のモチーフ

ここでは２日目の８月９日（水）の授業１限目から３限目で創作を行った「ひょっこりひょうたん島」のリズムダンスを取り入れた。

指導のポイントは、子どもたちがリズムを早すぎると感じないように、体を十分に前後左右に伸ばす大きな動きや、ゆっくりとしたスピードのリズムステップを取り入れることである。全員が同じ動きをしていても全体として動きの変化が感じられるように、前後に移動する工夫や高低差を取り入れる動き等の修正を加えるよう指導を行った。

・「おわり」の場面のモチーフ

雨や雷に驚く様子を声や身体で効果的に表現した動きや、指をさして急ぐように指示を出す隊長役の動き、クロールのような動きで急いで移動するモチーフ等を創作した。虹が出るシーンでは、音楽「にじ」のメロディーと歌詞のリズムに合わせリズミカルな動きを創作した。

ポイントは、雨が上がり、虹が出るシーンの子どもの心の高揚を表現することであり、セロファンのカラフルな傘を持つ手の動きや体全体の動きを生かしながら踊り、感度や嬉しさを演じるよう指導を行った。最後の場面は個人が別々の道を歩む内容を表現するために、傘を舞台上にそっと残し１人１人が退場する動きや仲間とのハイタッチ、手を振って見送るモチーフを取り入れた。

（７）踊り込み　＜８月１０日（木）５限目　１時間＞

何度も音に合わせて踊り込み、作品がスムーズに流れるように微調整を行った。指導のポイントは、起承転結が明確になるように配慮することである。また、作品の中で特に見せ場である場面（大蛇のシーンや雷のシーン）では、顔も踊っているかのようにオーバーアクションを取り入れるよう指導を行った。また、受講生同士の関係性が顕著に表れてきた時には、１人１人に声を掛け、感性や動きの表現を引き出すよう指導を行った。

（８）衣装、小道具の作成

「はじめ」「なか１」「なか２」「おわり」に必要な小道具である、オーロラや気球、虹を表現するために傘を用いた。創作ダンスの動きにカラフルな色彩が加わることによって、場面や舞台に表情が出るため、黄、赤、青、緑のセロファンを貼り付けた。セロファンを選択したのは、セロファンの透明感がオーロラや虹等の透明感、空気感を感じさせると考えたからである。

大蛇の作成では、授業で使用したヨガマット６枚を巻き胴に見立て、カップを目玉とした。２限目からダンスの創作と同時進行で進めていき、全ての小道具の作成には約１時間の時間を費やした。

（９）発表　＜８月１０日（木）５限目　約１０分間＞

題名を「僕らの大冒険～出会いと別れ～」と決定し、授業内発表会として照明をつけて発表会を行った。

全体の完成度としては、テーマに適した非常に優れた表現であり、振りや構成がバリーエーションに富み、子どもだけでなく受講生自身も楽しむことのできる、動きに富んだ発表であった。空間の使い方に工夫や変化がみられ、シ

ンプルな動きであっても壮大なスケール感のある場面が成立していた。また、感情表現が自然に出るように構成された場面展開や小道具等の使用方法は、身体の動きや表情と直結し同化するような工夫がみられた。この完成度の高さは、イメージ画の制作やその発表、意見交換等に始まり、ダンス創作シートの活用による自身へのフィードバックや新たな目標の設定、実践のための工夫等が構成されたからと考えられる。

Ⅳ.受講生の自己評価

授業終了後に受講生全員にイメージ画の制作からストーリーの制作、ダンス創作シートを活用したダンス制作活動を振り返り、自己評価をしてもらった。自己評価の中から、受講生の育ちがみられるものを抜粋する。

（受講生の自己評価より）

１．テーマ（題名）に合った振りや構成について

・冒険というテーマの中で、仲間や動物、景色との出会いと別れというサブテーマを一貫して表現できた。

・様々な冒険をすることで出会いから別れまで上手く表現できた。

・場面で感じていること、考えていることを表現できるように振りを考えた。

２．動きや感情表現について

・静から始まり、不安や驚き、楽しさ、勇敢さなど場面に合わせた様々な感情表現ができていた。

・伸ばすところは伸ばす、曲げるところは曲げるなどに加え、表情も上手く使えていたと思う。

・大きく体を動かして表現できるよう頑張った。

３．イメージ画、ストーリー、小道具等について

・みんなの絵がストーリーになった時、感動した。小道具も振りを考えているうちにどんどんアイデアが出てきた。

・傘が最初のオーロラと最後の虹を表現していて、はじめとおわりのつながりができていた。

・大蛇は上手く工夫でき、傘を使ったオーロラも表現できた。

・傘をオーロラや気球に見立てたり、ヨガマットを使って大蛇を作ったりして創意工夫ができた。

４．作品の完成度とグループの主体性について

・みんな相手のことを考えて協力してチームワークがばっちりだったと思う。何でも言い易い関係だった。

・１日目に加え、チームワークは格段に良くなり、結果として主体性もどんどん生まれて良かった。

・それぞれ自分の意見を持っていて、流されたり任せたりすることもなく、全員で一つの作品を作ることができていた。

５．自由記述

・創作の過程でいろいろなアイデアが出て最後にみんなが一つになり、良い作品ができた。

・最初は自分のリズム感のなさや体を使って表現することに悩んだが、仲間と協力して振り付けをすると個性が見えてきたように自分の中では感じた。みんなで体を動かすことが楽しくなってきた。先生も自由に考える枠を与えてくれたのでやり易かった。

・みんなに助けられ、６分少々のダンスを最後まで踊ることができて感動した。

・最初は自分の体で自由に表現することの難しさを感じ、自分ではオーバーに動かしているつもりでも相手には伝わりにくい表現になっていることが分かった。もっと研究していきたい。

・どんどん自分から動いてみよう、やってみようという気持ちに変わっていったことが自分でも驚きだった。

　ダンスは難しいと思っていたのに今では楽しくてたまらない。

・身体表現を通して仲間と一緒にイメージを共有したり、動きを伝えあったりして関係が深まっていった。

・作品を作り上げていく過程がとても楽しかった。最後の場面では、これで終わりかと思うと名残惜しい気持ちになった。そのくらい楽しい時間だった。

・一人だけでは完成しないパズルが全員のピースを合わせることで完成したような感じがした。１つの振り、動きだけでも何人かの意見が合わさってできていて、この６人だからこそ完成した作品だと感じた。

・初めはダンスというだけで抵抗があったが、だんだんと楽しく協力し合いながらできたことがすごく良かった。

・６人という少ない人数ではあったが、個人の考えや表現の仕方等自分にないものが多く勉強になった。

・リーダーとフォロワーのように仲間と触れ合う機会が先にたくさんあり、自分の意見や表現を出し合える関係になっていたからこそできた創作ダンスだと思った。

・ダンスの楽しさ、そして仲間と踊ることで色々なことが学べた３日間であった。

・またダンスに触れる機会がある時には、今回の経験を活かしたい。

自己評価から、自己能力に対する自信のなさや身体表現への抵抗を感じていた受講生が、授業の方法によって自身の能力が増長したこと、また、グループ活動での人間関係や協調性が自身の身体表現に反映されたことを感じており、自身の表現力を高めることにつながった気づきがみられた。

Ⅴ．考察と課題

受講生の自己評価では、授業を受ける前は身体表現に抵抗を感じていることが読み取れる。しかし受講生同士の創作活動により、自己を解放し表現を楽しむことができたと感じている。人とのかかわりにより身体表現ができる環境が整えられていた結果、受講生の心情に変化が表れたものと考えられる。受講生同士がお互いを尊重し、認め合うかかわりができたことが身体表現に対する抵抗を軽減させるきっかけとなり、身体表現を楽しむ要因となっていることが考察できる。子どもとのかかわりの中でもこの考察はたいへん重要であると考える。保育者が子どもの身体表現に対して認めてあげる、支援する言葉掛けをすることは、子どもの表現の育ちに大きく影響を与えると考える。作品の制作過程から最後の発表に至るまで、子どもの変化に気づき声を掛けていく指導が大切である。保育者は、子どもが友達とのかかわりを大切にして活動している時や、表現に対する新しいアイデアの提案をした時には認め、支援する指導を大切にしたい。

本研究において、制作過程から身体表現を行いやすい環境づくりのプログラムとして有効的だったと考えられる点は２点である。

１点目は、導入としてイメージ画の制作とストーリーの制作をしたことである。受講生それぞれが冒険のイメージを描画表現し、全員でストーリーを展開させた過程によって、身体表現作品のイメージを共有する環境が整えられたのではないだろうか。視覚的にイメージ画を共有する経験と内面を具体的に表現するストーリー制作の経験が、ダンス制作活動の入り口となり、より充実した表現活動に展開したと考える。受講生にとっては、特に、導入のイメージ画が身体表現を発展させる視覚的教材となり、身体表現への抵抗を軽減するきっかけ、また、自己の内面を引き出す糸口として効果的であったと考える。子どもとのかかわりの中でも、視覚的教材が表現したい内容のイメージを保育者と子どもたち同士で共有できるきっかけとなり、身体表現に結び付けていくことができると考える。例えば、舞台の壁面全体に描画を取り入れることで、子どもの表現力を引き出す環境が整えられ、より充実した表現活動の展開につながると考える。

２点目は、ダンス創作シートの活用である。自己能力に対する自信のなさや表現への抵抗を感じていた受講生にとって創作シートが指針となり、より具体的な発想が生まれ、円滑な協議やダンス制作のフィードバックにつながったと考える。

例えば、ダンス創作シート「（２）音楽の決定」では、各場面にあった選曲が曲のイメージに合わせた動きの制作につながっている。動きにはリズムに合わせる動きだけでなく、内面的な心情を取り入れた変化に富む身体の動きがある。受講生同士で互いに動きを観察し合い、比較をすることにより、音楽のリズムにとらわれない自由で即興的な動きも表出されていた。よって、起承転結を含めた「はじめ－なか１－なか２－おわり」の構成を身体表現で構築することができたと言える。子どもとのかかわりの中でも、選曲は重要な環境づくりに発展すると考えられる。保育者が聴覚教材として選曲した音楽を保育者と子どもたち同士で歌ったり、音楽を聴きながら踊ったりすることで、身体の動きや表情が豊かに展開されることが期待できる。

また、「（８）衣装、小道具の制作」では、オーロラや気球に見立てた傘を使い、身体と一体化させるという具体的な意識を持ったことによって、大きな動きで自己を解放することができていたと考えられる。ヨガマットで制作した大蛇においても、単に持って動かすという行為だったものが、大蛇の波形的で滑らかな表現と威嚇的な表現等を協議や振り返りによって具体的にイメージすることができていた。具体的なイメージの共有から動きを制作した結果、上半身と下半身の使い方に高低差を出す、マットを持った手を伸ばし曲げる、揺らす等の動きを生み出し、さらに顔の表情に至るまで小道具と身体を一体化させることができていた。このように造形表現と身体表現の融合によって、受講生が自己の表現力を拡大、増長させたと考えられる。

イメージ画の制作を導入とし、ダンス創作シートを活用した協議、フィードバックの集大成である発表では、受講生全員が身体で表現の楽しさを体感し、個々が冒険者や動物、風景になりきった身体表現ができるまでに成長している。これは、イメージ画や創作シートの導入の試みによって、他者とのかかわりが発展し、様々な自己表現的な動きを認め合い、一つになるという相互理解が深まったからである。「ダンス」という一つの作品が完成するプロセスにおいて、身体を動かすことへの不安や抵抗を払拭することができ、受講生たちが発表で大きな達成感を得たという結果から、今回導入した方法は、自らの身体を解放し発信する力と受信する力を身につける指導法として有効であると考える。

保育現場におけるお遊戯会や生活発表会のダンスでは、模範となる保育者の動きや子どもたちの表現力の引き出し方、環境の整え方が重要となる。そのためには、保育者自身が表現を楽しむ様子や自己を解放する様子を子どもに伝えることが理想である。また、子どもが表現のイメージを持ちやすい環境構成、例えば、ダンスのテーマに沿った壁面構成の作成や、ダンスに登場するものの造形物を環境に設置する等の実践が子どもの表現力の向上を促すと考えられる。そのような指導が行われる活動は、子どもたちの感情を引き出すことができ、心身の発達の助長につながるであろう。しかし、今回参加した受講生のように、表現に不安や苦手意識を持つ者も少なくない。

そこで、今回の実践を保育者が心掛け、保育者同士の研修や子どもの保育実践に活用することが求められる。日々の保育生活における様々な活動において、また、子どもとのかかわりの中で、造形、言語、音楽と身体表現をいかに結び付けるかを保育者自身が意識することが課題であると考える。

今後は、本研究のプログラムを受講した受講生が保育現場で行う実践をもとに、子どもの様子や表現の育ちについて、また、子どもとのかかわりの中でみられる造形、言語、音楽等の環境構築の実践と身体表現の支援方法の実践について研究を進めたい。